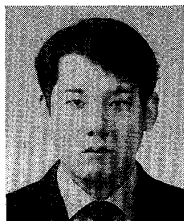


城戸奨励賞を受賞して

再声化介入が概念理解の達成を促進する効果
—バフチン理論の視点から—

(『教育心理学研究』第56巻第3号)

田島 充 士
(高知工科大学)



このたびは、栄えある城戸奨励賞をいただき、大変光栄に存じます。本研究の内容について、簡単に紹介させていただきます。

本研究の背景

理科の授業で教授される科学的概念の中には、生徒たちの日常経験文脈における既有知識(以下、「日常経験知」と呼ぶ)と矛盾する意味を持つものが少なからず存在します。このような概念を学習する際、多くの生徒たちが自分なりの解釈を行わないまま暗記してしまうという学習傾向の存在が指摘されていました(田島・茂呂, 2006)。

一方、田島らはバフチンの対話理論の観点から、科学的概念を理解するという行為を、概念と日常経験知との関係について、学習者ら自身の対話を通して矛盾なく解釈できることと捉えました。そして科学的概念を主張する話者と日常経験知に基づいて素朴概念を主張する話者間の対話において、対立意見を運用・変換し、自分自身の意見に積極的に取り込んでいく「操作的トランザクション」(Berkowitz & Gibbs, 1983)と呼ばれる交渉発話を多く使用する者が、この概念理解を達成する傾向にあることを明らかにしました。

本研究はこの知見を土台として、理解達成を促進するための支援・介入方法を検討したものです。そして教師が学習者らの発話を引用しながら、より深い解釈を行う対話へ誘導する「再声化介入法」と呼ぶ介入方法に着目し、その効果の検討を行いました。

本研究の概要

本研究の実験では大学生26名を対象に、2名1組の実

験参加者組に分かれてもらい、両者の対話を通して、課題とした科学的概念と日常経験知の関係を矛盾なく解釈することを求める半構造化面接を実施しました。そして、ここで作成された解釈が両者の関係を十分に説明できるものではなかった場合、実験参加者間の対話に対し、調査者が再声化介入法に基づく介入を実施しました。

以上の実験により得られた実験参加者間の発話プロトコルを対象に、Berkowitzらのトランザクション対話分析に基づく数量化分析を行いました。また、実験参加者らが行った概念解釈の内容についても検討を行いました。

発話プロトコルを対象とした分析から、再声化介入法には、(i)操作的トランザクションの使用を学習者に促進させ、(ii)科学的概念の解釈において、日常経験知のメタファーの使用を増加させ、両者の立場を考慮した説明を行うようにする効果があることが明らかになりました。そして本介入によって、介入前には見られなかった、科学的概念と日常経験知の関係を矛盾なく解釈できる実験参加者組が8組生じたことも明らかになりました。

以上の結果から再声化介入法には、理解達成を促進する効果があると結論付けました。その上で、本介入を活用した新たな実践の可能性について考察を行いました。

謝辞と今後の抱負

筑波大学人間総合科学研究科の茂呂雄二先生には、本研究の計画段階からご指導をいただきました。また本研究の主要なテーマは著者が、研究実施当時、埼玉県草加市立八幡小学校長だった鏑木良夫先生が主催された研究会「認知ゼミ」において、多くの教育実践者と出会い、議論を重ねる中で得たものです。これらのご指導・ご支援をいただいたことが、今回の受賞につながったのだと思います。ご支援をいただいた先生方すべてに、記して感謝申し上げます。

また本研究以後も田島は、理解達成を目指した介入法等について、引き続き検討を行っています。今回の受賞を励みに今後も、教育現場にお返しできる研究を目指し、より一層の努力を重ねていきたいと思っております。

引用文献

- Berkowitz, M. W., & Gibbs, J. C. (1983). Measuring the developmental features of moral discussion. *Merrill-Palmer Quarterly*, *29*, 399-410.
- 田島充士・茂呂雄二 (2006). 科学的概念と日常経験知間の矛盾を解消するための対話活動を通じた概念理解の検討. *教育心理学研究*, *54*, 12-24.